

如訛言、此間田野有草、俗名母子草、二月始生、莖葉白脆、每屬三月三日、婦女採之、蒸搗以爲饊、傳爲歲事、今年此草非不繁、生民之訛言、天假其口。

〔圓珠庵雜記〕は、こ草は、文德實錄に母子草とかけり、和名には庵蘆をぞよめれど、本草を見れば、それにはあらで、鼠麴草にてぞ有ける、もろこしにも、やよひの三日には、これをもちひにくはふるよし、そのふみにみえたり、葉の色のねすみに似て、花のかむたちのごとく黄なれば、たとへて名付たり、

〔曾根好忠集〕暮の春三月はじめ

は、こつむ彌生の月になりぬればひらけぬらしな我宿の桃

〔後拾遺和歌集二十三條太政大臣兼藤原のもとに侍ける人のむすめを忍びてかたらひ侍けり、

女のおやはらはらちて、むすめをいとあさましくつみけるなどいひ侍けるに、三月三日かの

きたのかた、三夜のもちいくへとて、いだしけるによめる、藤原實方朝臣

みかの夜のもちいはくは、じわづらはしきけばよどのには、こつむ也

〔和泉式部集三〕石藏より野老をこせたるては、こに、ぐさもちるいれて奉るとて、

はなのさと心もしらす春の野にいろくつめるは、こもちるぞ

〔散木弄詞集春一〕三月三日人のがりいひつかはしける

君がためやよひになればよづまさへあへのいちよには、こつむ也

〔倭訓栞後編十三〕ち、こぐさ 白蒿也、又河原は、こともいふは、こぐさに對して、父子草と呼

なるべし、

〔躬恒集〕ち、こぐさ

花の色はち、こぐさにてみゆれどもひとつも枝に有べきはなし

父子草